
人生の記録

裏切り者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生の記録

【Nコード】

N8336C

【作者名】

裏切り者

【あらすじ】

最後の部活の晴れ舞台となる文化祭、体育大会の記録の物語

Prologue

僕——池谷 悠司は今までの17年間本当に普通に生きてきた男である。

最初に自己紹介をしよう。私立の高校の放送部に所属している成績は中の上という没個性な高校生である。

しかし、そんな僕でも活躍出来る時はある。

そう、年に一度の文化祭と体育大会だ。

まず、文化祭から説明しよう。

我らが放送部は文化祭実行委員会と並ぶ、文化祭では欠かせない機関の一つなのだ。

全校放送の受付、オープニングのPV パート紹介 パートCM
フィナーレのPVの4つのビデオを作り、放映するという仕事をやりながら文化祭の様子を記録するという、普段の100倍は忙しいのである。

ちなみに普段は放送室で他愛のないおしゃべりをしている。

また体育大会では、業者さんとの協力、実況、BGM、撮影ということまた普段の50倍忙しいのである。

さらに、我が高校では文化祭と体育大会の間には一日しか猶予がないというまさかの悲劇。

僕は今年の部活が最後となる文化祭と体育大会で貴重な体験をすることが出来たため、ここに記すことにする。

Prologue (後書き)

一応処女作となりますかね（＾－＾）；

かなり投稿は不定期になりますが、よろしく願いしますm（）
|・
・
（m

途中から少し恋愛チックなものが入るかもです

第2話 朝の休み時間

8月24日

学校の夏季後期補習が始まった。補習といっても後期補習になるとただの授業なのだが……

「よっ」

夏休み明けの宿題に追われているこの時期になんて楽しそうな声を出すのだろうか少し殺意を抱きながら振り向くと、中学から一緒に腐れ縁(?)の三島 浩樹がそこには立っていた。

ちなみこいつも放送部である。というか部長である。小説を書くのが趣味で、しかも恋愛物しか書けないという、僕にしてみれば変態の一種ではなからうかという奴だが、成績はいい。

「おーおはよー」

まあここまでは社交辞令だろう。

「ゆーじい、随分眠そうだな。ついにボケが始まって昼と夜の区別がつかなくなっただか。」

これは社交辞令の域を超えた気がしたためとりあえず殴っておく。

「あははは んで文化祭の振り分けどうすんの？ アナウンスのほうの動態表早めに頼むよ」特に当日のシフト早めによるしく。」

「今日は古典があるな。よし、放課後までにはやっつくよ。」と僕

が言つとポカツ、案の定殴られた。

それから少し他愛のない話をして、浩樹は自分のクラスに帰っていた。

……あつ結局朝早く来たのに宿題やってない。
あいつあとで覚えてろよ。

それからやる気を無くした僕は文化祭のことを話していた友達の中
嶋 純希と芦品 壮大の話（文化祭に何をするのか）にまぜてもら
い、

「何もしたくない。当日もさっさと帰る。」

と言つた純希の頭をみんなでどつきながら、やけに脚が長い担任が
来るまで教卓で話していた。

第3話 一日の流れ

朝のSHRで担任が夏休み明けの定番な話をした後、そのまま英語の時間が始まり僕はうとうとし始め、気付くと3時間目の途中になっていた。

誰か起こせよ。と思いながら隣の席の壮大に出された宿題の範囲を聞こうと思い、小突いた。

「宿題なんか出た。」

「英語がプリント一枚出てるよ。ほらお前の分。」

「要らないよ。返品を希望する。」

「そうか。頑張れ。」

あつ授業中のこいつには何を言っても無駄だったか。

僕はプリントをファイルにはさみ、ノートを鞆から出す。そして顔を上げると黒板に『人間は何故イキルのか』と書かれているのを見た瞬間、出したノートを開かずにしまい、夢の世界に旅立つことを決心した。

昼休みになり、壮大と純希と一緒に弁当を食べる。

「ああよく寝た。」僕は背伸びしながら言う。

「お前は随分寝たな。夏休みボケか？」えらく普通なことを言う純希だなと思うと、そのうえから

「寝てこれから昼飯か、太るぞ。」の壮大の一言が被さり、絶妙なコンビネーションを醸し出す。

「大丈夫大丈夫。今から体育じゃん。原子レベルにまで消化してるよ。」

5時間目体育

僕はサッカーのキーパーをしている。運動は好きで、しかも小学生

のときサッカー部だったため、結構張り切るのだ。中学時代は体育のたびに怪我していた。

そして6時間目は体育の疲れを癒すリラックスタイム——じゃなくて担任の授業なのできちんと受けるふりをする。

俺の精神は20日後の文化祭に旅立っていた。

第4話 放課後の出来事

放課後――

長いHRの後、僕はすぐに放送部の部室こと放送室に行くことにした。

「池谷君」

教室を出たとき、呼び止められる。伊藤 千尋だ。隣のクラスのちよつと大人しめの女の子だ。6月の中間考查がきっかけで仲良くなった子だ。ちなみにその隣の女の子が三井 明美で、壮太が好きな女の子だ。

「はい、これお土産。」と紙袋が渡される。

「おおゝありがとう。どこ行ってきたの？」

「沖縄だよ。青い空、白い雲、碧い海が懐かしいよ。ここじゃ白いプリントが関の山だね。」

「あはは」

「池谷君はどこか行かなかったの？」

「どこも行っていないよゝ やから今から部活行ってくる。お土産ありがとうね。」

「あはは、ばいばい」

「ばいばい」

教室から部室まで20秒の間に紙袋を開けてみると、白熊のキーホルダーが入ってた。激しく沖縄じゃねえ……

部室に入ると、浩樹以外は1ヶ月ぶりに会つので挨拶をする。

「ちわーす」

「おう おはよう」と時間感覚を狂わす発言するのは西宮 礼司だ。ちなみにこいつは成績がとんでもなく悪い。

「いらつしゃいませ」と意味不明なことを言うのは一つ後輩の村野孝。こいつは鉄道が好きらしい。特にレールが。

そして浩樹が

「おう。これじゃまったく実感わかねえよな」と言う。

仕事もせずに文化祭まであと23日！っていうカウントダウンのプログラムを作ったはいいけど、全然減らないから単位を秒にしたら、あと1987200秒と表示されたらしい。

それを見て

「だねえ 全く分からん。」

と西宮が言つと、

「僕数字嫌いなんですよ。」

と村野も言つ。

浩樹が僕のほうに視線を向けてきたので、顔をそむける。朝のお返しだ。ん？朝…？

やべえ、シフト作ってねえ。

「シフト出来た？」

…… ああ、来ちゃったよ、爆弾。仕方ないから口から出まかせに

「こいつがここで、俺がここ来て、~~~~~ ……でいいやろ」

「わかった。とりあえずExcelで打ち込め。」

ふゝごまかせたぞ。とりあえず今日はシフト表作ったら6時（部活終了）になるなあ。しかたない、やるか。

第4話 放課後の出来事（後書き）

すみません。少し間が空いてしまいました。
更新頑張ります。

第5話 文化祭実行委員長

カタカタカタカタ……シフト表を作りはじめて20分が経って5時近くになってヘッドフォン外すと、いつも通りがやがやとうるさくなっていた。

っていうか人増えてるし……

少し日焼けした高一の女子4人組が向こうでがやがや話し、こちらでは高一、高二が世間話をするといういつもの光景だ。

僕も会話に参加しようとしたら放送室のドアが開き、柳川 奈美――文化祭実行委員長が入ってきた。

「ねえ、MD再生して音出せるやつ貸してよ。」

「何に使うの。」

「ダンスの練習。」

「へーお前ダンスもやってたんや。じゃあここにサインしてや。」

僕は機材貸出許可書を出して、いつも通りに仕事をこなした。

「ありがとう。んでどうやって使うの？」

ガクツ……頼むよ。

「分かった。僕がライン繋ぐよ。場所どこなん？」

「えっ本当？じゃあ、剣道場で待ってるね。」

バタバタバタバタ……

機材少しは運べよ。僕は心の中でつぶやきながら剣道場まで運んでいった。

「ほら、ここにこの端子を挿して、ここの電源いれたら音出るようになるよ。」

僕は毎日剣道場まで行って配線はしなくなかったので、柳川さんに説明しているのである。

「えー ここがここで……………?」
「どうやら理解能力が少し足りないらしい。おそらく明日も来ることになるだろう……」

「じゃあ6時になったら返しにいくね。」
「時間厳守でよろしく。」

僕は放送室に帰り、Excelを使っていたら瞬く間に6時になった。放送室には浩樹と二人きりだ。

「疲れたー 今日も何にもしてねー」
「あいつら遅いね。」
「機材か。」

6時5分くらいにようやく柳川が返しにきた。

「遅いよー」
「えっ、ちゃんと6時に剣道場出たよ。」
「そういうことか。明日から放送室に着くのを6時にしてくれ。」
「はい。じゃあバイバイ。」
「お疲れ様でした。」

ふーこれでやっと帰れる。

「ああ、俺の時計探してくれい」

…………… まだ帰れないみたいだ。

第6話 口は災いのモト

8月25日

いつも通りに7時に起きたと思ったら、実は7時30分であって、慌てて支度をした。おかげで一応いつも通りに8時5分に学校に着いた。

汗だくだったけどね……

「朝からトレーニングしてんの？」

ふー朝からいきなりの壮太から嫌みかよ。とりあえず純希を叩いてストレス解消だ。

「痛っ、お前が殴る意味はねーだろうが。」

「いや、お前が悪い。」

「なんでや!?!？」

……うん、明らかに悪いのは僕だよ。でもね、世の中は理不尽なことでだらけなのさ。

「お前ら毎日が楽しそうでいいよな。」

ああ……壮太に言われたらおしまいだな。でもここで感情的になったら子供だよな。うん、もう少し生き方を変えよう。

「お前には言われたくないわ。」

あっ子供がいた。純希は律儀にリアクションしてくれるからみんなによく弄られるんだよね。本人は気付いてないみたいだけど。

「お……はよ……う」

おお、ここでゾンビが出てきた。あれ？ゾンビって太陽の光浴びた

ら消えるんじゃない…… あっあれは吸血鬼か。

「池谷君、また余計なこと考えてたやろ。」

「うん、伊藤さんはゾンビか吸血鬼かって考えてた。」

「普通そういうことって素直に言うかな？」

「ごめんなさい。」

「よろしい。」

…… あっ吸血鬼がゾンビ化したやつか。納得、納得。

「池谷く〜ん、口に出てるよ？」

…… あらま。

「「口は災いのモト」」

壮大も純希も何故自分の机に戻っていくんだよ。見捨てるなあ。
っていうか、えっ……

「伊藤さん、手に持っているのは何でございましょう。」

「明美からのお土産の木刀だよ。」

ちよ…… ちよっ待ってよ

「池谷くん、痛いのは一瞬だから。」

「まっま待ってよ。話せば……」

「問答無用!!」

第6話 口は災いのモト（後書き）

なんかコメディーになりつつあります（＾－＾；

第7話 笑い声

「……………痛い。」

僕は朝に竹刀で殴られた後、まるで何もなかったように自分の席に戻り、そのまま気を失って4時間目が終わるまで寝ていたらしい。

まったく記憶にないんだけどね。

「まあ、どんまい。」

「あれは自業自得やろ。」

君達、僕を見捨てて何を言うか。

「あつ頭痛かったら、弁当食べれないよな。俺が食ってやろう。」

壮大よ。それは完璧に僕のことを心配してるんじゃないくて、僕の弁当が食べただけだよな。

「午後は体育あるし、食べとく。」

「うわあああ、渾身のボケをスルーされた。」

「これもまた自業自得。言い換えて妙なり。」

「そいえば、お前伊藤さんからなんか貰ってなかった？ なんやったん？」

「何で知ってるの？ たしかお前掃除だよな。」

「俺は目がいいからな。」

……………純希よ。ならお前の眼鏡は伊達眼鏡ということか？

「お土産でしょ。」

「壮大正解。南の島の白熊キーホルダーだった。」

「それ、南の島じゃないから。」

「おお、ハモった。」

……………驚いた行動まで一緒だよ。

「完璧にハモるなよ。音楽会じゃないんだから。」

「ハモりたくてハモったんじゃないし。」

「お前と浩樹の漫才よりはマシだと思うぞ。」

なにっ……以後気をつけよう。

その時、廊下から独特の笑い声が聞こえてきた。しかも僕たちの教室に近付いてくる。あの疲れる奴か……僕たちの心はシンクロしていた。

「あはは、悠司、お、あはは、前竹刀あはは、で叩かれ、あはは、たんだって？」

「野口、笑いながらしゃべるな。」

野口 勇、いつも笑っている自他認める楽道家だ。顔はいいから、もう少し笑い声を小さくしたら女子にモテるんだけどな。とにかくうるさい。

「素敵な勘違い、人はそれを『恋』と呼ぶ。」

「……は？」

「バイバイ。」

はあ、まったく台風みたいな奴だ。

このあと、何故か純希も壮大も

「頑張れ。」

「ご武運を。」

と言って去っていった。

「ちよっ、食い終わるの待ってよ。頭まだ痛いんだって。」

僕は……伊藤さんが顔を赤くしていたのを、気付かなかった。

閑話 登場人物のおさらい（前書き）

登場人物がよく分からないという意見がありましたので、登場人物の紹介です。

閑話 登場人物のおさらい

池谷 悠司…… 本編の主人公

放送部副部長であり、今年が最後の文化祭・体育大会が最後になるが、別に張り切っているわけではない。

三島 浩樹…… 主人公の親友

放送部部長であり、中学校からの主人公のよき理解者。感情の起伏が烈しい。

みんなを盛り上げるムードメーカー的立場。

中嶋 純希…… 主人公のクラスメイト

高校からの付き合いであるが、主人公のよき理解者。空気が読め、たまに難しい単語や四字熟語を使う。成績はよい。

芦品 壮大…… 主人公のクラスメイト

主人公とは高校からの付き合いであるが、各種のイベントや純希などのおかげで主人公とかなり親しい。また三井 明美のことを少なからず思っている。

伊藤 千尋…… 主人公のクラスメイト

おとなしい女の子ではあるが、怒ると怖い。自分から一番前の席を希望しているが、勉強熱心というわけではなく、寝るためである。

三井 明美…… 伊藤 千尋の親友

小学生のときから伊藤 千尋と仲良しであり、今年になってクラスが初めて離れてしまった。髪が長い。壮大が想いを寄せているとは知らない。主人公とは高校1年生のとき、同じクラス。

西宮 礼司……主人公の友達

放送部所属。中学のときから主人公と同じく放送部である。画像編集のセンスがある。また放送部の雑用を担当している。

村野 孝……放送部の後輩

高校１年生であるが、頼れる人材である。ただ、語り始めると止まらない。

来年度部長となる予定である。

柳川 奈美……文化祭実行委員長

剣道部部长とダンスの責任者を兼ねており、ものすごく活発的。部活説明会のビデオの剣道部の説明の時にアンパンマンのテーマを流して周りを驚愕させた。主人公とは中学のときから一緒だが、話したのは今年が初めて。

野口 勇……謎の人

とにかく声が大きくてうるさい。また言ってることがめっちゃで常人には理解出来ないが、的を得ていることが多い。数学のセンスは抜群。

閑話 登場人物のおさらい（後書き）

何か分からないこと、要望がありましたら、すぐにコメントしてください。

出来る限り、お答えします。

第9話 存在感

放課後、放送室には孝と高一の女子4人がいて、孝は編集、女子の4人は机で何か書いていた。女子たちは何か楽しそうである。よしよし、やっと仕事をしてくれるようになったか。よいことだ。

……ん？ 何か違うぞ？

「何してんの？ カラフルだね。」

「えっ、あつ三島先輩の誕生日カードです。」

沢山のマークが使われて、とても綺麗である。これも青春の一つだな、と思って僕は少しがっかりしてパソコンの前に座った。

「何しようかな。」

「先輩、テロップの出し方研究するって言ってませんでしたか？」

「おお、そういえばそうだった。」

「ああ〜思い付かん。」

ん？今、西宮の声がしたぞ。でも姿は見えない。幻聴か？僕が辺りを見渡していると

「ここだよ。」

手が一本出て来た。そこね。

「机の下で何やってんの？一人でかくれんぼ？」

「そんな人いるよね。浩樹とかさ。」

「あゝそうなんだ。」

「悲しいよね。」

「で、何してたの？」

「今年の放送のTシャツのデザイン。」

「ああ〜それもしなくちゃいけないのか。文化祭実行委員会はどうなんなん？」

「黄色のやつ。ドラゴンボールみたいな。」

「あああのドラゴンボールね。放送のはもっとカッコイイやつにし

てくれよ。」

「だったらお前も考えてくれ。」

「わかった。今から作る。」

「ええ、お前テロップの飛ばし方やるんじゃないの？」

「飽きた。」

「まだやってないだろうが。」

とにかく僕は画像編集ソフトを立ち上げて、作り始めた。

（数分後）……なかなか難しい。

家でゆっくりやるか。パソコン使う口実にもなるし。

僕は早々にあきらめ、テロップを作ろうとしたとき、足音が聞こえてきた。

バタバタバタバタバタ

あつ、そういえば今日もあいつ来るんだった。

第9話 存在感（後書き）

これから会話の際、

文化祭実行委員会↓文実

文化祭実行委員会のTシャツ↓文T

などと略す場合がありますので、気をつけて下さい

第10話 天然の対応と誕生日カード

ガチャガチャ……

「どうも。あれ使いたいんやけど。」

「そこに置いてあるよ。」

「えっ、どこ？どこ？」

「目の前に。」

「あっ、あった。ありがとう。借りるね。」

ボタン……ガチャガチャ

「ねえ、ひもみたいなやつがないんやけど、いいの？」

「それくらいの知識はあったか。ほら、ひもじゃなくてコードと呼びなさい。」

「ありがとう。このひも大事にするね。今日も6時でいいの？」

今日は6時に放送室に着いてね。」

「わかった。ありがとう。」

ボタン……ガチャガチャ

「ねえ、このひも何処と何処に結べばいいの？」

「このひもは此処と此処とを結べばいいの。」

「ありがとう。」

ボタン……ガチャガチャ

ふー、やっと去ったか。多分コードのことを『ひも』って呼んだの
あいつが初めてだよ。あっ女子四人とも笑うの堪えてる。ってゆ
ーか肩震えすぎ。

……あれ……あいつ誰だっけ？

「なあ、今の誰だっけ？」

「柳川さんやろ？ あの天然はあいつしかおらんって。」

「あんな2次元の中にしか存在しないような人いるんですねえ。感動しました。柳川と言えば鉄道の………」

「はい、止まらなくなっちゃうからストップ。」

30分後

「先輩、中島先輩に贈る格言とかありませんか？」

「ない。ある。」

「どっちですか……!？」

「いや、その、あるません。」

「だからどっちですか……!？」

「あるよ。」

「最初からそう言えばいいのに………」

「ん？なに？」

「なんでもないです。それ、ここに書いてくれませんか？ 読める字で。」

「サルに？」

「中島先輩にです……!？」

「わかってるよ。」

キュッキュッキュッキュ……

「これでいいやろ。」

『歳はとるのではなく、重ねていくものだと思つて。』

「先輩にしては上出来ですね。」

「うるせーな。」

第10話 天然の対応と誕生日カード（後書き）

アクセス数500を超えました！！

みなさん読んで下さってありがとうございます。おかげで10話までこぎつけました。これからもよろしく願います。

第11話 カラフルカード

それから30分後——8月25日18:00

浩樹は柳川さんと一緒に放送室に入ってきた。

「……中島先輩、ご誕生日おめでとうございます!!!!!!」

「A H A P P Y N E W Y E A R ! !」

「誕生日おめでとう。」

「それは『明けましておめでとう』だよ、池谷君。」

律儀に突っ込むのは柳川さんだけ——他の面々は僕の性格をよく存知のようだ。

「まあとにかくありがとう。みんなよく覚えてくれたね。」

「お前が昨日何回言っただと思うんだよ。」

「そうだった？」

「そうなの？」

「まあいいや、ほら、放送からプレゼントだよ。」

僕は女子4人から渡された誕生日カードを手渡す。『恥ずかしいから先輩から渡してください。』と貰ったものだ。

「おお、ありがとう。」

「カラフル」。中島君は幸せ者だね。あつ、このMD再生する機械とこのひもここに置いといていい？」

「うん、頼む。」

「友達待たせてるから、またね。」

「うい。じゃあな。」

「バイバイ。」

「中島君、後輩大切にしなさいよ。」

ボタン……バタバタバタバタバタ

「……お疲れ様でした。」

女子達も帰っていった。西宮と村野はいつの間にかいなくなっており、いつも通り二人になった。そして、いつも通り二人で浩樹の腕時計を探している。

「柳川の最後のセリフなんだったんだ？」

「俺に聞くな。あいつに聞け。」

「柳川の父さん、俺の父さんと職場一緒なんやで。しかも同じ英語科。」

「お前の父さんは高校の先生やつけ？」

「当たり前。」

そうこうするうちに、顧問が様子を見に来た。

「おい。下校完了時刻は6時15分だぞ。はよ帰れよ。」

「はい。」

「げっ、もうこんな時間か。」

「見つかったよ。」

「おっ、ありがとう。お前は優秀な警察犬になれるな。」

……次から探さんぞ。

第11話 カラフルカード（後書き）

明日テストです……

小説ランキングに参加しました！
もしよかったらクリックしてください

第12話 格言なメール

8月26日 朝

僕は今日も汗だくで登校する。教室に着いても、涼しくない……

「「おはよう。」」

「おーす。」

純希と壮大だ。

「なあ、なんでクーラー入ってないの？」

「えっ、入ってるよ。暖房か冷房かはわかんないけど。」

……ついにこいつイカレタか？

「パネルが壊れてるんだよ。」

「はあ！！？ あっ本当だ。えっいつから？」

「始業式の際にはもう壊れてたはずだよ。」

「知らなかった。じゃあとりあえず温度下げまくるか。」

ピッピッピッピッピッピッ

「壊れるよ？」

「壊わすなよ。」

ピッピッピッピッピッピッピッピッピッピッ

「おい、いい加減にせんか。」

純希のツッコミは手が出なかったら最高なんだけどな……痛い。

キンコンカンコン

8時20分のチャイムが鳴った。

「なあ、漢字テストの勉強したか？ 難しいすぎやろ、あれ。」

「えっ、純希、あれ今日なの？」

「うん。まさかやってないの？ やばいやん。」

やってねえ……

「ああ……無理、努力、辛抱、期待、落胆」

「『無理』だとは思いつながら『努力』や『辛抱』を重ねた結果、『期待』はもてたが結局『落胆』するのがオチってところか？」

「うう……頑張る。」

「人間諦めが肝心だよ。」

壮大に言われたらおしまいだよ……

「俺もやってないけどな。」

何！？ 壮大と同じだけは避けなくては。

「努力せねば。」

ちょうどその時、一通のメールが届いた。伊藤さんからだ。

『物事は変わりません。変わるのは私たちですよ。』

後ろを向くと、彼女は

「頑張つてね」と声を出した。

僕は心の中で『ありがとう』と言いつながら手をふつた。

……あつ、あいつ盗み聞きしてたな。

第12話 格言なメール（後書き）

更新遅れて本当にすみません。最近何かと忙しかったので……

気付いた時にはアクセス数1300を超えてました。この数字を励みに頑張っていきます。

第13話 お茶と呼び出し

8月26日 昼

「眠いよ。」

漢字テストのあった現代文の授業はは終わり、あれから漢字テストの勉強を努力した僕は机に突っ伏していた。……やっぱり慣れない仕事はするものじゃないな。

「悪あがきの結果はどうだったか？」

「半分は埋めたぞ。」

「お前が努力したの久しぶりに見たな。明日は太陽が西から昇るぞ。」

「むっ……失礼な。俺だつてたまにはちゃんとやるんだよ？」

「自分でも疑問形じゃねえか。」

「気にしたら負けだよ。」

「意味不明だな。」

とにかく疲れたことは事実だったので、その後の授業はいつもより増して熟睡であった。

昼休み

「腹減った。」

「お前はずっと寝てたんだからカロリー使ってないだろうが。」

「でも減るものは減るんだよ。」

僕は弁当箱を開けて、おにぎりを頬張った。すると運命とは不思議なもの……

『高2C組 池谷 悠司君、D組 柳川 奈美さん、E組 野口 勇君。以上の人は昼食後、大山先生のところに集まってください。繰り返します。………』

おっと、このメンバーは文化祭関係だな。早く食べて行かなくては。

「悠司、呼ばれたよ。」

「文化祭関係？」

僕は無言で頷いた。いや、正確には口の中はご飯が詰まっていたので、喋れなかったのである。

お茶がない！！お茶を！！

「大丈夫？ はい。」

伊藤さんがお茶を僕の目の前に差し出した。おお神は僕を見捨てなかった。伊藤さんに対する好感度アップだね。

「ありがとう、助かったよ。」

「どういたしまして。」

僕は素早く弁当箱の中をやつつけ、片付けた。ここで律儀に時間を計るのが純希である。あとから聞かされて、少しびっくりした。…… 38秒だったらいい。

とにかく僕はみんなに手を振りながら教室を出た。

第13話 お茶と呼び出し（後書き）

ずいぶん間があいちゃいました汗

続きを楽しみにしていた人には申し訳ございませんです。

実はもうすぐテストだったりするので、もしかしたら更新遅れるかもです。

第14話 職員室

僕は教室から出た後、廊下をまっすぐ歩いて職員室に向かった。

「失礼しまーす。」

僕が大山先生のところに行くと、すでに野口はもういた。………
だけ速いんだよ。

「おい野口、何で呼ばれたの？」

「なんかそれは、柳川が揃ってから話すってさ。」

「意味不明やな。なんでやる。」

「何度も説明するのが嫌なんじゃないの？」

「なるほど。だから結婚出来ないんだよね。」

「いや、なんか秋に結婚するとか、しないとか。」

「マジ!？」

「ホントに?」

「って柳川さん居たんですか?いつ来たか、全く気付かなかったんですけど。」

「結婚の話くらいからかな。あたしオーラないから。」

「……オーラ関係ないよね? 気配じゃないの?と思うのは僕だけ?」

「おう、揃ったかあ。いや、君達三人を呼んだのはだなあ。文化祭のことについてなんだが。補習期間が終わって、試験終わったら、今年はすぐに文化祭準備期間に入るんだけど、先に文化祭実行委員

会と放送部の下校延長が必要な人を調べておこうと考えたんだよ。」

「はあ」

「はい」

「この紙に学年、クラス、番号、名前を書いて出してくれ。」

「わかりました。」

「あつ先生、ダンスのメンバーも下校延長してほしいんですけど。」

「ああ、ダンスかあ。ちょっと待ってくれよ？確かこのへんにもう一枚あつたはず……」

「ダンス順調？」

「夏休みの宿題が終わってないせいで、練習来れてない人もいて大変なんよ。」

「おお、あつたぞ。この紙に書いてくれ。」

「はい。」

「野口はこのあと先生と一緒に来てくれ。」

「わかりました。」

「おお、もう二人は行っていいぞ。急に呼び出してすまんかったな。」

「はい、失礼しました。」

「はい。失礼しました。」

第14話 職員室（後書き）

すみません、間あきすぎですね汗

これからも頑張ります。

第15話 放送室の喧騒

放課後

僕はホームルームが終わるとすぐに放送室に向かった。別に理由はないけどね。

「やつほ。みんなやってる？」

高1生は高2生より授業数が1つ少ないため、村野たちが50分間先に部活できるのである。こちらとしては、文化祭が近いから、おしゃべりの時間ではなく、仕事にうまく活用してほしいのだが…

「何をですか？」

無理でした。

「期待した僕が馬鹿だったよ。」

「ん？どうした？」

「うわ、びっくりしたあ。浩樹驚かすなよ」

「別に驚かしてないよ。」

「そうですよ。」

村野よ。お前が口を挟む権利はないと思うぞ。

「今日大山先生に下校延長のメンバーを紙に書いて提出してくれって言われたんやって。誰が必要かな。あつ中学生はだめだってさ。」

「高2の3人と、高1が村野と那州 なすあきこ 明人 + αかな。」

「問題はそのαなんだよ。」

「っていうかそれくらいじゃないの？」

「あつ休日登校のメンバー表もついでに出しておこうよ。」

「いいですね。メンバーは先ほどのメンバー + 中3の…」

って誰が何言ってるかわかんないから。

「あの、僕諸葛孔明じゃないんで、一人ずつ言っただい。」

「はい。」

とりあえずホワイトボードにメンバーを書いていって、途中の村野の案で休日登校のメンバーも付け足して書いた。

そして僕は今日もエクセルに向かう。はっはっは、エクセルの鬼だと呼んでくれ。

「よっしゃ完璧。」

「お前自分の名前忘れてるぞ。」

「それでいいのいいの。俺サボるから。」

「へいへい、わかりましたよ。真面目に仕事しますよ。」

第15話 放送室の喧騒（後書き）

海外からの投稿ははじめてです笑

第16話 非通知

8月26日土曜日 朝

今日は久しぶりの休み。とはいってもついこの前まで夏休みだったのだが。

僕は休みの日はいつもより1時間くらい起きるのが遅い。今日はケ―タイの着信に起こされる。ん？着信？しかも非通知・・・誰だ！？

「はい。もしもし？」

「あつもしもし。浩樹だけど。」

「お前なあ、不気味だから朝一から非通知でかけるのやめろよな。」

「わかった。前向きに検討する。つまりはNOだ。」

「はいはい。んで何のよう？」

「いや、何のよう？じゃなくて、お前以外もうみんな放送室来てるよ？」

「へ？」

「いや、だから、もうみんな休日登校してるんだって。」

「ん？夢の続きかな？」

「いい加減にせんか！！ 1学期中に今日と明日の分の休日登校出したのはお前だろうが。はやく来い！！」

「あつ。そつか。」

「とにかく待つてるからな。みんなの分のお菓子買っておいたほうがいいぞ。」

「Yes, sir！！ 高一以上はみんなきてるの？」

「ああ。」

「宿題もっていい？」

「馬鹿、はやく来い！！」

「冗談だよ。じゃあ30分後に。とりあえず文実の準備風景撮っておいて。」

「わかった。じゃあな。」

ふーん。これでまた散財か・・・そろそろ安い店でも探すかな。

シャララララシャラララ〜

ん？ 今度はメールだ。この忙しいときに誰だ？
また非通知だよ・・・ってメールでどう非通知にしたんだ？

『おはよう。柳川です』 まだ学校来てないの？ 中嶋君がダンスの練習風景撮りに来たとき、愚痴ってたよ笑

MDで音楽流すやつ貸してほしいんだけど。放送室の雇って重たいじゃん。だから剣道場まで持ってきてよ。よろしく。

野口が10時から代表者会議するのに誰も来ていないじゃないかって怒ってるよ。早く行ったほうが身のためだと思う。

あつあとお腹すいたからダンスのメンバーがお菓子買ってきてほしいって。

ジュースは4リットルくらいお願い

P・S・30分以内に学校来ないとお菓子とジュース代自腹ね^ -
^
『

・・・僕に平和な夏休みをください。

さあて、そろそろ現実を見据えようか。
とにかく、学校に向かうか。

第16話 非通知（後書き）

今年最後の投稿になりそうです

なんかグダグダになりつつあるので、少し予定変えるかもしれません
ん > <

第17話 コンビニ戦争

とにかく僕は朝食を掻き込み、制服に着替えて自転車に乗った。今は急いでのので、普段つけてるイヤホンはつけない。

「どこのコンビニで買うかな」

家から学校まではコンビニに3つある。今は時間短縮をせねば。とりあえず信号で決めたら速いかな。

「あいつら人使い荒いよな…… っていうかお菓子&ジュースって必要経費として予算で落ちないかな」

「無理ですよ」

「うわぁ、びつくりした なんて那州がいるんだよ！！っていうかいつからいた」

「最初からいましたよ？」

「お巡りさん。不法侵入です」

「ここ交番ありませんよ？」

読者の大半はきつと覚えていないであろう。15話で名前だけ出てきた人物である。

「環境に優しく生きよう。ストップ・ザ・温暖化、那州 明人です。」

「誰にアピールしてんだよ。選挙にでも出るのかよ」

こいつ、面白いやつだが、ノルとすさまじく壊れる。去年の打ち上げの焼肉で箸焼いてたからな。勘とノリと雰囲気で人生を乗り切ってる奴だ。……羨ましい。

「お前も遅刻？」

「やだなあ。違いますよ」 寝坊です。」

「そっか。馬鹿なんだな。」

「休日登校自体を忘れるよりはマシですけどね」

「うつ……………」

「言葉につまったら負けですよ」

「くっそ、後で覚えてろよ」

「はいはい、どうせ忘れてしまいますよ。あっコンビ二通り過ぎましたよ？」

「踏み切りのところにする。いいから黙ってるよ……………」

「いらっしやいませ」

とにかくコンビ二到着。

「スポーツドリンクと、スナック菓子でいいか。お前は何か……なんだそれ。」

「花火です!!」

「しまえ」

「嫌です。学校で花火します」

「停学になるぞ」

「大丈夫です。監督責任でなるのは先輩だけです」

「なるほど、つまり僕は阻止しないといけない訳か」

「そうなのです」

こうして、第一次コンビ二戦争は火ぶたをきって落とされた。別名、不毛な争いとも言つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8336c/>

人生の記録

2010年11月9日15時28分発行